令和５年11月30日
農推第１２７５-８号

# 病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

## 特に注意！（12月）

### トマトキバガ

図1　府内で誘殺された成虫

### 特徴

- ◆ 成虫（図1）は体長5～7㎜。翅は灰褐色で、黒色のまだら模様が散在する。
- ◆ 幼虫（図2）は、終齢で約8㎜。体色は淡緑色～淡赤白色で、頭部は淡褐色。頭部のすぐ後ろに細い黒色横帯がある。
- ◆ 成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。卵は寄主植物の葉の裏面などに産み付けられ、終齢幼虫は土中や葉の表面で蛹化する。
- ◆ 1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。
- ◆ 主な寄主植物はトマト・ナス・ピーマン・トウガラシなどのナス科植物。

図2　幼虫

図4　トマト果実の被害

図3　トマト葉の被害

**トマトでの症状**

- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する（図3）。
- ◆ 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数㎜程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する（図4）。

※図2～4：出典「植物防疫所Webサイト」
無断転載を禁ずる。

### 防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JA に確認する。
- ◆ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ トマト、ミニトマトでは下記特殊報を参考に登録農薬を散布する。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。
- ◆ 薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統（IRACコード）が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

詳しくは「病害虫発生予察特殊報第1号トマトキバガ」もご参照ください。
http://www.jppn.ne.jp/osaka/R5th/R5tokushuhou/231031 tokusyuhou01 tomatokibaga.pdf

次回の情報は12月下旬にお知らせします。
◎「防除指針」 http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html
R5年10月31日現在、Google Chromeで大阪府病害虫防除グループホームページが開かない障害が発生しています。
閲覧の際はMicrosoft Edge、Apple Safari等からご覧ください。

**農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。**

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。

# 水稲（越冬対策）

**病害虫の越冬量を低下させ、
来春以降の発生抑制につなげましょう。**

## ジャンボタニシ

成貝

卵塊

### 特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。田植直後（約20日間まで）の小さな苗のみを食害する。繁殖力が強く、多数の個体が苗を食べつくすこともある。
- ◆ それ以外の時期に被害はないが、個体数を減らすことが肝要。

注）成貝の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稲の被害を防ぐために」より引用。

### 防除のポイント

- ◆ 越冬個体は約8割が地表から深さ6cm以内に分布。稲刈り後にロータリーによる水田耕起（耕うんを浅く、ロータリー回転を速くする）を行い、土中に潜った貝を粉砕したり、地表で寒気にさらし凍死させて、越冬貝を減らす。
- ◆ 耕うん機等の土に貝が混じり、他の水田に移動させてしまうことがあるので、移動の際は器具についた土をしっかり落とす。

カラー技術資料「ジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）から稲を守りましょう！」はこちら
http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf

## 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

縞葉枯病（ひこばえでの病徴）

### 特徴

- ◆ 縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介されるウイルス病である。
- ◆ 発病した株をヒメトビウンカが吸汁して、保毒する。
- ◆ 本田初期に発生すると、新葉が細くなり巻いて垂れ下がって枯れ、「ゆうれい症状」と呼ばれる状態になる。本田後期の感染では、黄緑色の条斑を生じ、出穂が異常となって出すくみ症状を起こす。
- ◆ 本府の主力品種ヒノヒカリ、きぬむすめ、キヌヒカリはいずれも本病への抵抗性がないため発病に注意が必要。
- ◆ 発病を防ぐには媒介するヒメトビウンカを防除する必要がある。
- ◆ ヒメトビウンカは成虫で越冬するため冬から春先の対策も重要。

### 防除のポイント

- ◆ ウイルスに感染したひこばえは、本病の伝染源となる恐れがあるので、放置せず早めに刈り株をすきこみ処分する。
- ◆ 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、ヒメトビウンカの越冬密度を下げる。

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。



- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

# バラ科果樹（もも、すもも、うめ等のサクラ属）

## クビアカツヤカミキリ

幼虫

株元に溜まったフラス

成虫

### 防除のポイント

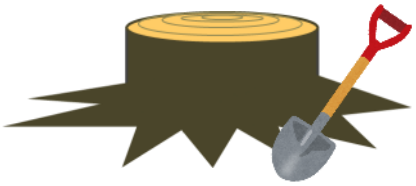
- ◆ 被害が大きい樹は伐採し、破砕（チップの厚さは10mm以下を目安）や焼却することが望ましい。
- ◆ **伐採した枝や幹はほ場に放置せず処分する。**すぐに処分できない場合は、ネットやビニルシート等で2重に覆う。
- ◆ 幼虫は根部も加害するため、**なるべく抜根する。抜根できない場合は、**伐採後の切り株をネットやビニルシート等で2重に覆い、内部の幼虫の羽化後の分散を防ぐ。
- ◆ 本種は特定外来生物に指定されており、移動が制限されているので伐採後の残渣処理についても注意すること。
- ◆ 秋に大量のフラスを出している被害樹からは来年の6月～8月に成虫が羽化してくる可能性が高いので、冬～5月までに成虫脱出対策を完了するようにする。

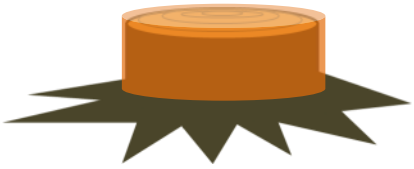
### 伐採後の切株について

**なるべく伐根する**

伐根できない場合は、切株をビニルシートや肥料袋等で覆う

さらにネットで2重に覆う（根部まで全て）





### 処分に伴う運搬について

- ◆ 本種は特定外来生物に指定されており、伐採樹であっても、内部に幼虫が潜んでいる場合は運搬が制限される。このため、**処分のための運搬であっても市町村の指示に従う**こと。
- ◆ 市町村焼却施設（もしくは市町村の清掃工場）で焼却可能な場合は、ネットで被覆する等の**分散防止措置を実施の上**、現地より運搬して焼却する。

### 野焼きについて

- ◆ 廃棄物の処理と清掃に関する法律第16条の2により、**野焼きは原則として禁止**されている。
- ◆ 一方で施行令第14条第4項において、「農業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却」については例外とされている。
- ◆ **例外に該当するかどうかは市町村によって異なるため必ず確認し、なるべく焼却施設にて焼却する。**

**「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策（R5.3改訂版）」についてもご参照ください。**
http://www.jppn.ne.jp/osaka/color/Aromia bungii/kubiaka2303.pdf

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。



- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

# 温州みかん

## 貯蔵病害

緑かび病

### 特徴

◆ 青かび病、緑かび病、軸腐病等がある。
◆ 青かび病や緑かび病は主に傷口から感染する。

### 防除のポイント

◆ 収穫前に**トップジンM水和剤**（青かび病、緑かび病、軸腐病）、**ベフラン液剤25**（青かび病、緑かび病 ほか）等を散布する。
◆ 果実が濡れている時は収穫しない。また、収穫時、果実に傷をつけないように注意する。
◆ 貯蔵を始める前に果皮を乾燥させる（予措）ことで貯蔵後の腐敗が少なくなる。
◆ 貯蔵時の庫内温度は5℃前後、湿度は80～90%にする。

## ミカンハダニ（越冬卵含む）

ミカンハダニによる葉の被害※

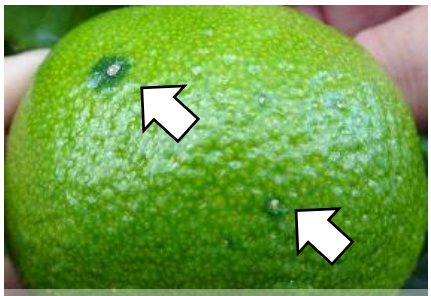
### 特徴

◆ 果実や葉に寄生し、吸汁する。吸われた部分は、色が抜けて白くなる。
◆ 日当たり、風通しの悪い密植園や枝葉の混みあったところで多発する。
◆ 冬期は低温のため、増殖は抑えられるが生息はしている。春になり暖かくなると、増殖を開始する。

### 防除のポイント

◆ 収穫後の園では、12月中旬～1月上旬にマシン油乳剤（**機械油乳剤95（ハダニ類の越冬卵）**、**ハーベストオイル**、**スプレーオイル**）等による防除を行う。
◆ 樹勢が弱っている場合は、冬期のマシン油乳剤で薬害（落葉助長）が生じやすいので、3月中～下旬に成分97%製剤のマシン油乳剤（**ハーベストオイル**等）を散布する。

## カイガラムシ類


ナシマルカイガラムシ

フジコナカイガラムシ※

### 特徴

◆ 葉や枝、果実に寄生し、多発した場合は、樹勢が落ち、果実の商品価値を低下させる。

### 防除のポイント

◆ 収穫後の園では、12月中旬～1月上旬にマシン油乳剤（**機械油乳剤95（ヤノネカイガラムシ、その他のカイガラムシ）**、**ハーベストオイル**、**スプレーオイル（ヤノネカイガラムシ、その他のカイガラムシ類）**等）による防除を行う。
◆ 樹勢が弱っている場合は、冬期のマシン油乳剤で薬害（落葉助長）が生じやすいので、3月中～下旬に成分97%製剤のマシン油乳剤（**ハーベストオイル**等）を散布する。
◆ 樹幹や枝に寄生することが多いので、葉や果実だけでなく、これらの部分にも十分薬液がかかるように散布する。

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。



- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

# ぶどう（越冬対策）

## カイガラムシ類

クワコナカイガラムシ＊

### 特徴

◆ ぶどうでは、フジコナガイガラムシやクワコナカイガラムシ等が加害する。
◆ フジコナカイガラムシは幼虫、クワコナカイガラムシは卵のうで越冬する。

### 防除のポイント

◆ 12月～3月上旬に粗皮削りを行い、越冬密度を下げる。

# もも（越冬対策）

## カイガラムシ類

ウメシロカイガラムシ＊

### 特徴

◆ ももでは、ウメシロカイガラムシとクワシロカイガラムシ（白色～灰白色）、ナシマルカイガラムシ（黒色～茶褐色）等が加害する。
◆ ウメシロカイガラムシやクワシロカイガラムシは成虫が、ナシマルカイガラムシは幼虫が、枝に寄生して越冬している。

### 防除のポイント

◆ マシン油乳剤（**機械油乳剤95（カイガラムシ）**、**トモノールS**、**スプレーオイル等**）による防除が遅くなると薬害の危険性があるので、12月中旬～1月下旬までに行なう。
◆ マシン油乳剤を散布した後は、石灰硫黄合剤の付着が悪いので、少なくとも1ヶ月の間隔をおいて散布する。

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。



- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

# きゅうり（収穫後防除）

## 黄化えそ病

ミナミキイロアザミウマと
キュウリ黄化えそ病被害葉※

### 特徴

- ◆ キュウリ黄化えそ病は、メロン黄化えそウイルス（MYSV）によるウイルス病であり、キュウリ、メロン、スイカ、シロウリ、ニガウリ等に感染する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。
- ◆ MYSVは、ミナミキイロアザミウマによって媒介される。

### 防除のポイント

- ◆ MYSVを媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
- ◆ 発病株は取り除き、完全に枯死させてから適切に処分する。
- ◆ 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根し、施設内を除草したのち、2週間以上密閉して、ミナミキイロアザミウマを餓死させる。

## 退緑黄化病

タバココナジラミと
キュウリ退緑黄化病被害葉※

### 特徴

- ◆ キュウリ退緑黄化病は、ウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）によるウイルス病であり、キュウリ、メロン、スイカ等に感染する。
- ◆ CCYVに感染すると、葉に退緑小斑点を生じ、次第に小斑点が増加・癒合しながら徐々に黄化する。
- ◆ CCYVは、タバココナジラミによって媒介される。

### 防除のポイント

- ◆ CCYVを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ 発病株は取り除き、完全に枯死させてから適切に処分する。
- ◆ 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根し、施設内を除草したのち、2週間以上密閉して、タバココナジラミを餓死させる。

## キュウリ黄化えそ病とキュウリ退緑黄化病について

- ◆ 近年多発しているキュウリ黄化えそ病とキュウリ退緑黄化病は、症状で見分けることは困難である。
- ◆ ミナミキイロアザミウマ、タバココナジラミを施設外へ拡散させないため、栽培終了後は必ず施設を閉め切る。なお、両害虫を餓死させるために、施設内の餌を残さないよう閉め切り前の除草を徹底する。
- ◆ 栽培終了後から残さ撤去までにコナジラミ類やアザミウマ類のまん延防止を目的として**キルパー**を使用する。ただし、この場合、処理後に作付けできる作物の種類は限られるので登録をよく確認する。

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。



- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

# ねぎ

## ネギハモグリバエ

葉の食害痕

### 特徴

◆ 葉の内部を幼虫が食い進み、その痕が細長く白い筋になる。
◆ 新系統が発見されており、従来に比べて一葉あたりの幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害するため、葉が白化したようになる。

### 防除のポイント

◆ 発生を認めたら、系統に関わらず、「ハモグリバエ類」、「ネギハモグリバエ」に適用のある**グレーシア乳剤**、**アファーム乳剤**などにより、発生初期の防除を徹底する。

「H31年病害虫発生予察特殊報「ネギハモグリバエ別系統」」もご参照ください。
http://www.jppn.ne.jp/osaka/H31nd/tokushu/negihamo.pdf

## ネギアザミウマ（えそ条斑病）

えそ条斑病の葉の病斑

ネギアザミウマ

### 特徴

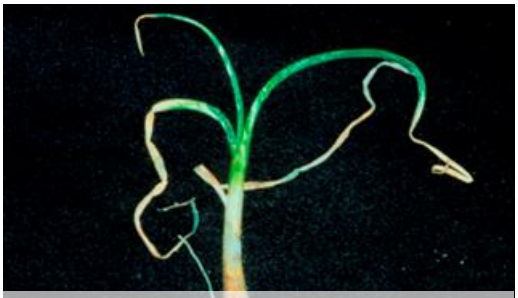
◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

### 防除のポイント

◆ えそ条斑病に対する有効な薬剤はないので、媒介昆虫であるネギアザミウマの防除を徹底するとともに、感染株を見つけたらほ場外に持ち出し適切に処分する。
◆ えそ条斑病の病原ウイルス（IYSV）は一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、**グレーシア乳剤**、**プレオフロアブル**、**スミチオン乳剤**等を散布する。なお、薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

# たまねぎ

## べと病



べと病（苗における発病）　＊

### 特徴

◆ 育苗時や定植後に、被害残さ等から感染し、越年罹病株として１～２月に病徴を現し、周辺への伝染源になる。越年罹病株は、葉色は光沢のない淡黄緑色で、生育も劣る。

### 防除のポイント

◆ 越年罹病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
◆ **ジマンダイセン／ペンコゼブ水和剤**、**ダコニール１０００**、**ランマンフロアブル**等を予防的に散布する。

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。



- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。

# あぶらな科野菜（キャベツ、こまつな、しろな等）

## 根こぶ病

キャベツのしおれ症状と生育不良＊

### 特徴

◆ 定植後１ヶ月頃から晴天の日中に葉がしおれるようになり、やがて葉色・生育が悪くなり、激しい場合には枯死する。

### 防除のポイント

◆ 発病した株は、根ごとほ場外へ持ち出し処分する。
◆ 収穫作業は未発生ほ場より行い、汚染ほ場を拡大させない。
◆ 汚染ほ場の作業後は、機器や履き物等を洗浄する。

## 菌核病

キャベツでの発生

### 特徴

◆ 暖冬・多雨時に発生が多い。

### 防除のポイント

◆ 菌核が土中に残って伝染源になるので、発病株は、ほ場外へ持ち出し処分する。
◆ なばなやレタス等、本病が発生しやすい作物との輪作を避ける。水田との輪作は防除効果がある。
◆ キャベツやはくさい等で発生が予想される場合は、結球開始期から**ロブラール水和剤**、**ベンレート水和剤**等を予防的に散布する。

**農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。**

※原図：（地独）大阪府立環境農林水産総合研究所
＊原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑（大阪府植物防疫協会）
無断転載を禁ずる。



- 病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。（http://www.jppn.ne.jp/osaka/）
- 農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。